

私はガンディーを殺していない I Did Not Kill Gandhi

2005年 35ミリ カラー 104分 インド 日本語・英語字幕付き

監督：ジャヌ・バルア

プロデューサー：アヌパム P. ケール

脚本：ジャヌ・バルア

サンジャイ・チョウハーン

撮影：ラージャー・チャクラヴァルティ

音楽：バッピー・ラヒリ

編集：ディーバー・バーティヤー

美術：ニティーシュ・ロイ

出演：アヌパム P. ケール

ウルラミー・マートンドカル

プラヴィーン・ダバス

ボーマン・イーラーニー

ワヒーダー・ラフマーン

ディヴィヤー・ジャグダレー

※ブルーレイ・ディスクは35ミリプリントからテレシネにより作成したものです。日本語字幕が見つらい箇所があります。ご了承ください。

ヒンディー文学の教授ウッタム・チョウドリーは、大学を退職後、認知症の兆候が現れ始める。娘のトリシャは父の世話に追われて仕事が手につかなくなる。そして婚約者ともすれ違いが多くなり、破談になってしまう。ウッタムの症状は次第にひどくなり、自分がガンディーを殺したという妄想に取り憑かれる。部屋に閉じこもり「私はガンディーを殺していない」とつぶやくウッタム。途方に暮れるトリシャは知り合いの精神科医コターリーに相談する。コターリーはウッタムがガンディーを殺したという妄想に取り憑かれているのは、子供の頃のトラウマに原因があると判断する。そしてそのトラウマを取り除くため、偽装裁判を行うことを提案する。

インド独立の父と言われるガンディーは、1948年狂信的なヒन्दゥ教徒により殺害された。平和の象徴でもあるガンディーは、インドの紙幣をはじめ、至る所にシンボルとして使用されている。その一方、人々の心の中からガンディーの平和主義は忘れさられようとしているのではないか。本作にはジャヌ・バルア監督の強烈なメッセージが込められている。認知症の治療として行うラストの偽装裁判は監督のアイデアであるが、専門家の医師もこの治療法に注目しているという。アジアフォーカス・福岡国際映画祭2006で日本初公開され、福岡観客賞に輝いたインド映画の傑作。

## 監督メッセージ

この映画「私はガンディーを殺していない」は、現代の社会的現実についての私の見方のコラージュです。私は社会の普遍的な3つの側面に触れようと試みました。現在の世界において、ある意味では共通しており、また懸念の的でもある問題です。それは、平和が失われてしまったこと、痴呆の患者を社会で受け入れるという問題、そして複雑な家族の状況の中での女性の役割という問題です。こういった問題は、もともとは私が長年にわた

って心の中にとどめてきた3つのアイデアで、それで別々の3本の映画を製作する予定にしていたものでした。しかし、最初のアイデアに基づいて脚本を書き始めると、残りのふたつも自動的に内容の一部になってしまったわけです。

私の故郷のアッサム州では、政治的混乱が頻繁にあります。私も多くの流血の惨事を目撃しました。この地域における社会的な腐敗や、特に若者の墮落を見るにつけ悲しい思いをするばかりでした。まるで解決不可能な問題に対する唯一の答えは暴力しかない、社会全体が信じ込まされているかのような状態でした。このような状況において自分のような映画監督にできることは何だろうか、何年にもわたって私は考え続けてきました。そして、さまざまな形で暴力が振るわれるのを目の当たりにして、そういった数多くの問題への解決策はガンディーにあるのではないかと考えるようになりました。特に彼の思想である非暴力の理論ではないかと思いました。不幸なことに、私たちはガンディーの居場所がない世界をつくりあげてしまいました。あらゆる家庭において、特に若い人びとの中で、ガンディーの平和と非暴力の理論は失われてしまっています。現在では人びとは“ガンディーなんか自分たちに関係があるのか？”と頻りに尋ねるようになりました。彼の思想について人びとが語ることなど、ほとんどなくなりました。そして、その過程において社会は一日一日と寛容さを失っていったのです。こういった考えをもとにして、失われたガンディーの価値観を人びとに思い出させることができるような映画を作ろうと私は決心したのでした。

しかしすぐに気がついたのは、平和と非暴力の思想だけでは、映画として観客を引き付けるのに十分ではないということでした。というのも現代人は、そういった言葉に対して、ほとんどアレルギーを起こすほどうんざりしているからです。それでほかのアイデアも盛り込む必要があると考えました。

90年代に私が前作の「虹に乗って」のリサーチをしていたところに、アッサム州などにあった数多くの少年鑑別所を訪れました。その中のひとつで、私はひとりの守衛に出会ったのですが、彼と私は数回会って、とても仲良くなりました。あるとき彼が働いている少年鑑別所の監督官を待っている間に、彼の家族についての話を始めました。すると突然、私にこう言ったのです。“殺すつもりなんかなかったんですよ。彼は親友でしたから。ナイフを手にしていて、そうってしまったんです。”と。私はショックを受けました。彼が何を言っているのか理解できませんでした。後になって監督官が説明してくれたところによると、その守衛は痴呆患者で、自分が友人を殺したと思いつているとのことでした。実際のところは、友人は事故で亡くなっていたのです。

すぐさま私はこの話に関心を持ちました。そしてすぐに彼がかかっている精神科の医者に出会って、彼の病気について、さらに詳しい説明を聞きました。そういった患者の心のあり方について、その医者が言った言葉に私は心を動かされました。その医者から教えてもらったのは、痴呆やアルツハイマーの患者たちは、いつも純粋だということでした。彼らは嘘をつくことができないのです。彼らは自分が感じているそのままを表現します。また隠し事もできないなどということも知りました。そして、これが私の映画の強力な素材になり、この実在の人物を映画の中ではウッタム・チョウドリー教授として取り入れることにしました。また、純粋な心から発せられるガンディーについての最後の言葉を映画に入れることができたのも、思いがけない贈り物だったと思います。

このウッタム・チョウドリー教授は映画の中ではボンベイ大学の引退した言語学教授ですが、この興味深い登場人物を得てから、私はさまざまな痴呆症患者やアルツハイマー病患者の数多くの病歴を調べ始めました。数人の高名な精神病医や精神分析医にも面談しま

した。また、そういった患者と生活している家庭や家族も訪問しました。私が特に知りたかったのは、そうしたケースに家族がいかに対処しているかということでした。病気が進行していく状況や、次第に変化していく患者の症状、また患者の家族の行動パターンが徐々に変化していく様子、近所の人びとの行動などを知りたいと思いました。このリサーチは、ウッタム・チョウドリー教授と彼の家族のメンバーの性格を決定する上で非常に役に立ちました。また、精神医学分野で働く人びとの勤勉さや、よき精神科医の心を理解するのにも役立ち、それが最終的には医師コターリーという登場人物に反映されることになりました。

そのような家庭や家族、またそれぞれの性格について研究し分析している間、以前には自分で気が付いていなかった数多くの特徴を発見しました。そういった患者がいる家族では、ほとんどの場合、男性の行動変化が女性の行動変化と反比例していくのに気が付きました。患者の病気が進行するにつれて、女性が以前より感情的になり、より患者に対する愛情を深めていくのに対して、家族内の男性は次第に実際的になり、より合理的な思考に傾いていくように思われました。実際に、チョウドリー教授の例は別として、映画の中で最も困難な登場人物の例は、教授の娘で社会学者であるトリシャでした。彼女は状況に感情的に対処しましたが、彼女の兄弟であるカランとロヌーは、より現実的に対応するようになり、映画の中でも非常に際立っていました。私は教授の家庭をインドの典型的な教育水準の高い中流階級として描き、観客には映画の中の登場人物の少なくともひとりと一体感をもってほしいと期待しました。そして世界中の観客の反応を私は大変うれしく思っています。

この映画は、製作できなくても不思議ではありませんでした。だからこそ、ウッタム・チョウドリー教授という難しい役を演じたばかりでなく、最初のプロデューサーが手を引いた後で、映画のプロデューサーを買って出てくれた俳優のアヌパム・ケールには心から感謝しております。(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)

## ジャヌ・バルア

Jahnu Barua

### 監督プロフィール

1952年アッサム州ゴウハティ生まれ。ゴウハティ大学で科学を専攻した後、インド映画テレビ大学(FTII)で映画製作を学ぶ。「Aparoop」(82)で監督デビュー。この作品は国立映画開発公社(NFDC)で製作された初めてのアッサム語映画となった。これまでの監督作品の多くは国内外で高く評価されている。「The Catastrophe」(88)では、アッサム語映画を国内外に初めて知らしめるとともに、ロカルノ国際映画祭ではシルバーレオパード賞を受賞。「海まではまだ遠い」(95)は海外の40以上の国際映画祭で紹介された。そのほかの作品に、「河は流れる」(99)「虹に乗って」(02)など。「私はガンディーを殺していない」(05)は、アッサム語映画界の中心的存在であるバルア監督が手がけたヒンディー語作品。(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)